



説教要旨 「心の壁は根深い」

ルカによる福音書 17章 11～19節

エルサレムへの旅の途中、イエス様はサマリアとガリラヤの間を通られました。当時、ユダヤ人とサマリア人の中には根深い対立がありました。もともとはサマリア人もユダヤ人と同じルーツを持つイスラエルの民でしたが、その歴史の過程において異邦人との混血が進んだことから、ユダヤ人はサマリア人を“汚れた民”と蔑み、サマリア人もまたユダヤ人を毛嫌いしていました。その対立の最前線とさえ言えるサマリアとガリラヤの間において、「重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて、『イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください』と言った」(13節)のです。当時この病気にかかった人は、“汚れた者”と見なされ、一般の人々と共に住むことも、近くに寄ることもできなかったということです。『同病相憐れむ』。町から追い出された彼らは、ユダヤ人もサマリア人も関係なく同じ病の者同士で共同生活をしていたのでしょうか。彼らは“仲間”であったのです。だからイエス様のもとへ一緒に来て、「“私たち”を憐れんでください」と叫んだのです。

憐れみを求めることは取引ではありません。自分にはお返しするものがなにもない。あなたにとって何もメリットはないけれどもわたしを助けてください。そう願うことです。イエス様に憐れみを求めた彼らは自分には何もないことを知っていました。事実彼らは何も持っていなかった。財産も権力も、宗教的な「清さ」も。そしてユダヤ人とサマリア人の隔たりさえも彼らは持っていなかった。しかし彼らはその病が癒されたとき、もはや一緒にいることが出来なくなってしまったのです。彼らと社会との隔たりがなくなったとたんに、彼らの間にユダヤ人とサマリア人の隔たりが復活したのです。さっきまで共に生きていた者たちが分かれたれてしまった。一人で戻ってきたサマリア人を見たイエス様はそのことを悲しまれ、嘆かれたのではないのでしょうか。

「サマリアとガリラヤの間」イエス様はその対立の最前線を歩まれ、人々の憎しみを一身に負い、自ら十字架の死へと進み行かれるのです。